〈特集〉

國學院大學栃木短期大学における資・史料レスキュー活動

坂本　達彦

はじめに

小稿では、本学における文化財の調査・研究及び保全活動について、筆者が関わったものを中心に述べていく。昭和41年（1966）に開学した本学には、昭和60年に日本史学科が設置された。その後、平成23年（2011）、学科改変により同学科の教員は、日本文化学科日本史フィールドに配置換えとなって現在に至っている。日本史学科・日本史フィールドの教員は、短期大学が置かれた栃木市・栃木県域の歴史についても研究し、学生や地域社会に還元してきている[(1)]。また、地域資料の調査及び保全活動[(2)]、被災文化財のレスキュー活動などもおこなってきた[(3)]。

本号は文化財レスキューの特集号であるが、本稿では未被災の文化財

---

(1)『栃木史学』（1987年～、現在休刊中）、國學院大學栃木短期大学編『歴史のなかの人間』（おうふう、2012年）・同『栃木文化への誘い』（下野新聞社、2013年）など。

(2) 平成25年（2013年）以来、栃木市太平山神社宮司家の史料及び小山市個人蔵の史料を預かり、整理作業を行うとともに、授業などで活用している。後者の史料群については、本特集菱沼論考を参照のこと。

また、考古学担当教員のもと、市内の遺跡の分布調査や発掘調査なども行われている。現在進行中の発掘調査に関しては、下記のウェブサイトを参照のこと。

https://www.kokugakuintochigi.ac.jp/tandai/etc/info/hakkutu/hakkutu.html

(3) 東日本大震災後の本学による文化財レスキュー活動は、拙稿「東日本大震災と文化財・地域史研究」（『歴史評論』748号、2012年）参照。

を対象とした活動を扱う。なぜなら、被災すれば保全対象としての優先順位は上昇するが、被災していないからと言って、その文化財を調査・研究・保全する必要がないという訳ではないからである[(4)]。

また、調査した文化財が、後日被災することもある。実際、本学でもそのような事例に遭遇している。平成 25 年度・同 27 年度に、本学の教職員及び学生は、栃木市太平山において石造物調査を行った。調査中の平成 27 年 9 月、関東・東北地方を豪雨が襲い、山内各所で土砂崩れが発生し、調査済みの石造物が複数倒壊した。調査成果は報告書にまとめられており、その一部には被災前に調査した情報が用いられているのである[(5)]。

以下では、小山市域における古文書調査、太平山神社の絵馬調査を事例に、本学の活動を紹介していく。

1　小山市での委託事業

筆者は、平成 28 年度より同 30 年度にかけて、小山市の「旧・梅の宮宿､本沢河岸周辺の歴史的遺産を活用した地域活性化実行委員会」(以下、「実行委員会」) より依頼を受け、本学職員・学生・卒業生とともに、近世史料の調査・研究活動を行った。具体的な対象は、日光山裏道[(6)] の梅の宮宿が置かれた小林村と、巴波川の本沢河岸が設置された上泉村があった地域である。

平成 28 年度は、小山市に寄託された当該地域に関わる史料の撮影と、現地をフィールドワークして新史料の発掘を行った。後者に関しては、これまで小山市でも把握していなかった史料群を複数確認し、非常に大きな成果を得た。平成 29・30 年度には、慶應義塾大学が所蔵する上泉

---

(4) 宮城歴史資料保全ネットワークや、ふくしま歴史資料保存ネットワークなど、将来の災害に備えて結成･活動してきた史料ネットワークも存在する（佐藤大介「歴史遺産を未来へ」･阿部浩一「ふくしま歴史資料保存ネットワークの現状と課題」(『歴史学研究』844 号、2011 年))。

(5) 詳細は、國學院大學栃木短期大学『平成二七年度栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業成果報告書　太平山の石造物』(2016 年) 参照。

(6) 日光道中野木宿と日光例幣使道栃木町をつなぐ脇街道である。

村の古文書を調査した。その数は非常に多く、全点の撮影はできなかったが、貴重な史料を多く把握できた。調査・研究成果の一部は、平成30年12月9日に、現地向け報告会も行い、地域住民の方々に還元することができた。

実行委員会も、調査の成果を報告書としてまとめている[7]。筆者も依頼を受け、学生とともにその一部を執筆した。学生にとって、報告書に記名で執筆することは初めての経験であったが、無事に書き上げてくれた。先述した、新発見の史料についても、目録を作成し、掲載した。

さらに、本事業で収集した史料は、授業をはじめ、本学主催の古文書講座のテキスト、学生の研究会活動や卒業研究の作成などにも活用された。

2　太平山神社の絵馬

本学は太平山麓にキャンパスがあり、先述の通り、山内の文化財調査などを行ってきた。太平山神社は、古くより太平山に鎮座し、瓊瓊杵命・天照大御神・豊受姫大神をはじめ、多くの神々を祀っている[8]。当社には、多くの絵馬が奉納されており、栃木県（平成28年度より令和2年度まで）と、歌麿を活かしたまちづくり協議会（平成30年度以降）の支援も受け、筆者が顧問をつとめる「近世史研究会」と「物と伝承の会」が合同で調査を行っている。

調査対象の絵馬は、境内に存在した絵馬堂に掲げられていた大型のものである。現在、絵馬堂は解体されており、絵馬は倉庫に移されて保管されている。両研究会では、倉庫より絵馬を取り出し、ホコリを払い、採寸と写真撮影を行ってきた[9]。倉庫に戻す前には、エアキャップで絵馬を梱包し、倉庫内での破損を少しでも防げるようにして返却してい

---

(7)『旧・梅の宮宿、本沢河岸周辺の歴史的資産に係る調査報告書』（旧・梅の宮宿、本沢河岸周辺の歴史的資産を活用した地域活性化事業実行委員会、2017年）・『旧・梅の宮宿、本沢河岸周辺の歴史的資産に係る調査報告書Ⅱ』（旧・梅の宮宿、本沢河岸周辺の歴史的資産を活用した地域活性化事業実行委員会、2018年）。

(8) 太平山神社ホームページ（http://www.ohirasanjinja.rpr.jp/history/）。

(9) 拙稿「展示実践報告「太平山神社の絵馬」」（『日本文化研究』第3号、2018年）参照。

る。絵馬の題材は多種多様で、奉納年代も 18 世紀半ばから昭和 50 年代と幅広いものである。令和元年度までは、調査成果を報告書にまとめている[10]。

また、栃木市で開催される歌麿まつり及び本学学園祭である「斯花際」において展示活動を行い、年度末には地元向け報告会などを開催してきた。展示活動では、実物の絵馬は移動が困難であるため、ほぼ実物大のパネルを作成し展示した[11]。

歌麿まつりでは、奉納者のご子孫が展示をご覧になり、絵馬に描かれた看板を保存しているとのご連絡をいただいた。この絵馬は明治２年（1869）に奉納されたものであり、当時の栃木町にあった医師の屋敷を題材としたものである。屋敷の前には、薬の名前が書かれた看板が描かれており、これが現存していたのである[12]。その後、看板は寄贈いただき、本学園参考館に収蔵されている。幕末維新期の栃木市に関する文化財を、保全することができたのである。

３　令和２年度の絵馬調査

令和２年（2020）は、年明けから新型コロナウイルス感染症（以下、Covid-19）が世界的に流行し、世の中を一変させた。先述の通り、これまでは主に倉庫内に保管されている絵馬を調査してきた。当該年度は密を避けるため、例年に比べて少人数かつ短時間で拝殿・本殿・社務所内などに掲げられた絵馬の調査を行った。

10 月 19 日の調査には、助手岸美知子、日本文化学科２年生大倉穂乃花・金子美咲・齋藤保乃花・宮達希、同１年生久保有加が、同月 26 日の調

---

[10] 國學院大學栃木短期大学近世史研究会・物と伝承の会『平成二八年度栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業成果報告書　太平山神社の絵馬』（2017 年）・同『平成二九年度栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業成果報告書　太平山神社の絵馬』（2018 年）・同『平成三〇年度栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業成果報告書　太平山神社の絵馬』（2019 年）・同『令和元年度大学地域連携活動支援事業成果報告書　太平山神社の絵馬』（2020 年）（以下、「『〇〇年度報告書』と略す」）。

[11] 斯花祭での展示については、前掲拙稿 2018 年を参照。

[12] 前掲『平成三〇年度報告書』。

査には、金子と日本文化学科１年生の井上琴絵が参加した。なお、筆者も両日とも参加した。本調査で確認できた絵馬は、表（次頁）の通りである。栃木県立博物館が刊行した調査報告書に掲載されていたものや、有栖川宮熾仁親王の文字を使用したもの、２代目喜多川歌麿の筆とされる絵が描かれたものなど、多くの絵馬を確認できた[13]。

ただし、Covid-19 の流行によるサークル活動の制限や、例年とは異なる授業形態への対応などもあり、学生は十分に研究会活動に時間を割くことができず、報告書の作成などは行えなかった。また、当該年度も歌麿まつりに参加したが、前年までの方式では見学者の密を作るため、ウェブサイトによる絵馬の画像公開を行った。

おわりに

本稿では、近年における本学の活動のうち、筆者の関わったものを紹介してきた。今年度も、近世史研究会と物と伝承の会は、絵馬の調査事業を継続している。しかし、Covid-19 の流行は更に拡大しており、活動の大きな支障となっている。現在（令和３年９月）は調査が困難なため、過去のデータの整理と分析を中心に行っている。データの分析を行っているのは、日本文化学科２年生井上琴絵・長澤いぶき・船本弦太郎・町田翼・三浦春奈・村上昴・山本周平、同１年阿部杏海・井上佳優の９名である。その成果は、第 11 回歌麿まつりにあわせてウェブサイトを更新する予定で作業を進めてきたが、残念ながら歌麿まつりの中止が決定した。しかし、せっかくの学生たちの成果である。そこで、今年度も、歌麿まつりの開催予定期間に限定で公開することとした。詳しくは、本事業のウェブサイトをご覧いただきたい[14]。

今後も筆者は、絵馬や古文書に限らず、地域の文化財を調査・研究・

---

[13] 栃木県立博物館『栃木県立博物館調査研究報告書　とちぎの絵馬』（1985 年）、栃木市史編さん委員会編『目で見る栃木市史』（1978 年）。

[14] QR コードは右の通り。
URL は https://sites.google.com/kokugakuintochigi.ac.jp/ema である。

保全し、その活動を通じて学生の教育も行っていきたい。各地の文化財レスキュー活動の事例でも明らかなように、研究者のみではその運営は不可能である。もちろん、全ての本学学生へ参加を強制するというわけではなく、文化財保全活動に関心を持った学生に関わってもらいたいと考えている。参加学生には、卒業後、その経験を活かして地域社会の活動へ積極的に参加し、貢献してくれることを期待している。

【表】令和２年度調査絵馬目録

番号*	絵　馬　名	奉納年月日	西暦	縦	横	備　考
拝１	花栄句碑記念献詠			51㎝	158㎝	「東都東洋城」奉納
拝２	大願成就奉納太平山神社	昭和51年11月吉日	1976年	106㎝	75㎝	「栃木市万町辰元」奉納
拝３	大額奉納連名（壬生町干瓢商奉納絵馬）	大正６年１月吉日	1917年	64㎝	133㎝	鮫島大将閣下揮毫、奉納の世話人は森田米吉他２名
拝４	寄附連名（有栖川宮熾仁親王揮毫絵馬寄附者連名絵馬）	明治27年３月	1894年	73㎝	140㎝	「製作師荒木豊吉、塗師久江儀平、金工師小林盛次、渡辺盈謹刻」
拝５	寄附奉願	紀元2511年５月	1881年	84㎝	141㎝	
拝６	太平神社	明治16年３月	1883年	121㎝	252㎝	「正三位勲一等藤原常民敬書」
拝７	本殿建方	（近代）		84㎝	141㎝	「足利大々講社」奉納
拝８	（栃木肥料商組合奉納絵馬）	明治26年	1893年	58㎝	123㎝	
拝９	奉納太平山神社（宇都宮市在住下都賀郡人会奉納絵馬）	大正８年	1919年	107㎝	192㎝	「陸軍大将正三位勲一等功二級男爵鮫島重雄拝書」、「宇都宮市額帯看板博士工匠」製作
拝10	（劣化のため解読不能）			82㎝	182㎝	

番号*	絵　馬　名	奉納年月日	西暦	縦	横	備　考
拝11	太平山神社（埼玉県北埼玉郡原道村大字道目太々講奉納絵馬）	大正８年９月20日		1919㎝	158㎝	「正堂栗原謹書」
拝12	奉納太平山神社大願成就（青木庄吾奉納絵馬）	皇紀2600年	1950年	116㎝	60㎝	青木庄吾は「元栃木町青木菓子舗現在東京尾久町」在住
拝13	東京共栄講二十周年記念奉納太平山神社	昭和46年10月吉日	1971年	103㎝	61㎝	
拝14	太平山神社（埼玉県北埼玉郡原道村大字道目太々講奉納絵馬）	大正６年１月吉日	1917年	66㎝	150㎝	「陸軍大将正三位男爵鮫島重雄拝書」
拝15	太平山神社（太平山神社社名号額）	（明治25年カ）	（1892年）	132㎝	78㎝	年代は拝４より推定、有栖川宮熾仁親王の文字
拝16	太平山神社			52㎝	96㎝	「正二位伯爵通稽書」
拝17	神徳仰彌高			56㎝	150㎝	「従一位通之書」
拝18	祭神霊			89㎝	166㎝	「英良謹書」
拝19	交通安全神社	昭和38年11月吉日	1963年	59㎝	41㎝	「東京葛西江戸川講」とあり
社務所１	（製糸関係絵馬）			45cm	39㎝	中央にしめ縄状の生糸、その下に「古河町天神町小澤一業知」とあり
社務所２	（連歌絵馬）	大正15年３月吉日	1926年	69㎝	2m25㎝	
社務所３	（連歌絵馬）	（文化８年）	1811年	54㎝	1m35㎝	「文化辛末穐」、「下皆川大平連」とあり、『目で見る栃木市史』によると絵は２代歌麿のもの
社務所４	奉献（西洋画絵馬）			39㎝	92㎝	「越後国」の人物が奉納したものと思われるが劣化のため解読不能、果物や食器が描かれている

番号*	絵　馬　名	奉納年月日	西暦	縦	横	備　考
社務所５	（放鳥絵馬）	明治37年８月	1904年	73㎝	104㎝	「東京神田住　岡田悦次」とあり
星宮１	奉納太平山神社	昭和辛酉（56年）秋	1981年	74㎝	1m72㎝	中央に「天満宮文章學社」とあり、栃木市野原泰の奉納、「正石書」とあり
星宮２	（星宮社名額）			94㎝	47㎝	中央に「星宮」とあり
星宮３	（太平山神社子易神社社名額）	平成22年	2010年	51㎝	1m60㎝	中央に「子易神社」とあり、「平成庚寅歳子易祭」とあり

＊拝は本殿・拝殿、社務所は社務所、星宮は星宮に掲げられていたもの
表の作成：井上琴絵